



TITLE:

<批評・紹介> 仁井田陞編 「近代中國の社會と經濟」

AUTHOR(S):

米田, 賢二郎

---

CITATION:

米田, 賢二郎. <批評・紹介> 仁井田陞編 「近代中國の社會と經濟」. 東洋史研究 1951, 11(3): 274-276

ISSUE DATE:

1951-10-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138926>

RIGHT:

## 近代中國の社會と經濟

仁井田陞編

昭和二十六年五月三十日 東京 刀江書院發行

A 5 判 三五〇頁 定價 四〇〇圓

本書は仁井田博士の序文にもある通り、中國現代社會研究委員會の報告書の一部にあたる。本研究委員會は中國社會の基本構成、農村の近代化と商工業の變革、近代政治及び近代意識の形成發展を、研究分野を異にするものが、共通のねらいを以て協力する仕組となつていものである。此の事は凡そ次の目次をみただけでも推察することが出来る。

- 1 新民主主義における地方行政および司法の變革 平野義太郎
  - 2 中國における地方自治制度近代化の過程——國民政府による——松本善海
  - 3 華北農村の村費——現代中國の地方財政の研究 中村治兵衛
  - 4 保教と變法 市古宙三
  - 5 孫文主義土地革命理論の發展構造——三民主義研究の一部——山本秀夫
  - 6 中國近代工業の發展 遊部久藏
  - 7 中國におけるギルドマーチャントの構造 今堀誠二
  - 8 幫・同鄉會同業公會とその轉化 幼方直吉
  - 9 中國農村社會と家父長權威 仁井田陞
  - 10 祈雨習俗 直江廣治
  - 11 現代中國文化と舊宗教 酒井忠夫
  - 12 中國現代文化の民族的形式 野原四郎
- 此の様な多方面にわたつた諸論文を全部批評紹

介すると云う藝當は、私などの到底考えられる所ではないから、自分の興味を持つた次の三論文を代表として紹介してみたい。但し此の三論文は本書の中で特に優秀であるとか、比重が強い等の理由から選んだものではない。

## 中國農村社會と家父長權威

此の論文は序文によれば、中國農村に於ける家族關係を、家長の有する家父長的性格を構成的に把握することによつて、中國社會の實質的構造に迫り、有史以來の社會的變革の途上にある中國の現状の正しい理解に資すると共に、ワグナー、エスカラ等の舊前の大家の誤解を正さんと云う大抱負のもとに書かれた報告書の梗概である。私の理解に於いて要略すれば「中國の家は十人以下四・五人の小型家族に分れて獨立している様であるが、實體はそうではなく家長は家族を所有しているが、同時に族長から強い規制を受けている。即ち族長——家長——家族と立體的に構成されている。其の意味で小型家族は獨立したものでなく、構成的には大家族のそれである事を所謂文献のみによらず、杉之原・内田氏、其の他の諸氏の華北農村法的慣行調査をも資料として自由に驅使して論證しよう」と試みたものである。

此の觀點から論旨を進めて、第二節・同族結合と族内規範で、族田の發達の差が示すごとく、華北と華中華南とは、前者がはるかに族的結合が弱い、然し其の華北でさえも所によつては（樂城縣）家長は族長に或る程度服さねばならぬ。そしてこの例は、異例と云うにあたらぬだろうと説いてい

る。第三節家族構成と家族分裂では、中國の家族は歴史的に見て、小型家族を構成する條件が早くから成立しており、均分主義は確かに之を助長するものであるが、均分のみが家族構成を判断する要素ではない。親權の無制約性、婚姻權などを考えると大家族の構造なることを否定出来ない。そしてどちらを重視するかと云う事は、所謂見解の相違ではあるまいかと。且つこの均分化が徹底すれば農家の經營が困難となり、最も安價な勞力として家族を奴隸的に使用するようになる。かくして第四節家父長的權威と家内奴隸制では、家族は生産奴隸に過ぎないことを多くの資料から論證している。最後の第五節家族共產制では家産に對する父子共有制が可成り強いが、それでも家長の管理權或は處分權に優位をみとめざるを得ないと主張している。

此の博士の「中國の家族構成は小家族の中に含んだ大家族である」と云う中國家族二重構成説とでも名付けるべき此の説は、從來の漠然たる大家族説に比較して中國家族の構造を著しく浮彫にしている點に大きな意義がみとめられるが、然し何故に此の二重構成が採用されねばならぬかと云う事は何もふれられていない。

單なる梗概にすぎない本論文では批評も差控えて此の意義のある論文の本報告の一日も早からん事願つておきたい。

#### 祈雨習俗

此の種の研究として最初のものであり非常に面白く拜讀した。先づ農業の國中國に於いて農耕儀禮が民衆の日常生活

秩序に如何に深く喰込んでいるかを述べ、次いで祈雨の型を整理して次の四つにまとめている。

(1) 晒龍王 烈日の下に雨神である龍王を晒すと龍王は苦しまざれに雨を降らすであらうという考え方のもの。

(2) 盜龍王 他所から龍王を盗んで來て自分の村に安置して雨を祈るもの。

(3) 巡迴 龍王をかついでまわつて泉又は潭で雨を祈るもの

(4) 取水 村落から可成離れた神聖な池泉に行つて水を持ち歸る法

次いで此の四型の比較を行つて祈雨儀禮にともなう種々の問題に對して一應の見解を下している。尙此の問題については次の様な點が今一つ考えられねばならないのではないか。

(1) 盜龍王の場合他村から龍を盗んで來る事は、自分の村さえ雨が降れば他の村はどうでもよいと云う考え方が根底にある。此の兩村が何故に利害を同じくして同一の祈雨儀式を行ひ得るか

(2) 祈雨習俗として旱天の續いた時始めて行ふ臨時の祈雨のみ書かれてゐるが、地志等に見える定期的な年中行事化された祈雨をも併せ考える必要がないだらうか。

#### 華北農村の村費

同氏は日支事變以後日本人によつて行われた華北及び內蒙古の諸調査の中から河北・山東・山西の十數村の所要經費を

(1) 如何なる基準方法で賦課されているか (2) 集めた經費は何のためどんな方法で支出されるか (3) これにみられる特色は

何かの三點を中心にして考察している。結論として村費の支出は

(1) 豫算がなく、必要に應じて隨時徴収するもの

(2) 豫算がないが必要な出費は記帳し公表するもの

(3) 豫算制が採用されているもの。

この三つに分類出来るが、(2)の形式が支配的であり、丁度市町村制の実施されていない頃の日本の村落に似ていると考えてよからうと云う。更に負擔の基準は、所有面積によるものが50・57で絶対多數。耕作面積によるもの4・57。所有面積と耕地面積の二本立て勘案するもの7・57。其の發展は①—③—②のコースをゆくのが原則であると。

以上二點が氏の研究成果の中心をなすものであるが、單にこれに止まらず村費と村落構造との關連、或は其の費用の支出内容にも及んで、村費を通して村全體の構造を分析している。本論文は次の二點で意義がある。(1) 今迄の地方研究と名付けるものゝ多くは縣程度であり然らざる「村」の研究も行政的研究が主たるものであつた。此の論文は行政の裏付をなす財政的研究の最初のものである。正に氏の言の如く在來研究の盲點をつくつと云う語も誇張ではない。

(2) は(1)の長所も結局は之に歸着するのであるが實態調査の整理と云う點である。戰時中に多くの實態調査が行われ、發表もされてはいるが、大半は「生のまゝ」の資料で其の結果の分析綜合した歸納的な研究は極めて少數である。本論文は其の一つで、論旨の展開の具體的なこと、結論が客觀化され、

明確なことは、官公廳の文書或は政綱・條文等に依據した、現實よりも在るべき理想型を述べたに近い諸論文に比して實態調査の強みを遺憾なく發揮している。但し河北の一部を中心とした調査で北支全般に及ぼし得るか否かは問題であり、論旨も狭く制限されているが、假りに之等の缺點があるとしても、此の種論文の必然的な弱さで、氏の手腕を責める事は困難であらう。

以上私の好みに任せて三編だけ選び簡単な紹介批評でお茶を濁した。論文が多方面にわたつてゐる反面、序文にもある如く各論文は概ね素描の範圍を出てゐない。正しい方向に發した此の研究會が現下の困難な出版事情を克服して一日も早く詳密な報告書を公刊していただきたい。文部省が數多の中から特に選んで科學研究費と刊行補助費を出している點よりも斯界一般の期待の程も推測されるからである。研究會としての眞の評價はかかつて其の後にあると云うべきであらう。然し本書とても現代中國社會の變革過程と變革の諸前提を明らかにせんとした綜合研究であり、且つは邦人による貴重な實態調査の整理であつて中國に關心を持つ者の必ず一讀すべきものである事は自信を以て斷言出来る。

(米田賢二郎)